

平成30年度 事業報告書

- (1) 学校目標に基づく優先課題
- (2) 教育の充実
- (3) 学生募集
- (4) 学生支援
- (5) 就職支援
- (6) 教職員組織
- (7) 施設・設備
- (8) 武蔵野ネットワーク
- (9) 地域貢献・社会貢献

専門学校武蔵野ファッションカレッジ

《概要》

(1) 学校目標に基づく優先課題

学校目標 『成長を実感できる仕組み作り』

『成長を実感できる仕組み作り』として『ループリックによる学習到達度の可視化』に取り組み3年目となる。学生との面談等で目標に近づいたことを実感できたが、カリキュラム全体からするとまだまだ部分的な取り組みとなっている。カリキュラム全体での取り組みとすることが課題である。

(2) 教育の充実

『優れた人格と実践力をもった人材』の育成に努めた。

実践教育を掲げ『期間限定ショップ【incubate】』『incubate collection ファッションショー』等を複合的カリキュラムの成果発表としてPDCAサイクルに法って行い一定の成果を上げるものとなっているが、社会が変わり現在の学生達は以前の学生と比べ価値観が変わってきている。社会状況に合った人材育成となるよう、教育手法の進化が必要である。

(3) 学生募集

出願数は微増となった。本校の強みは、競合校と比べ、対象学科すべてが「職業実践専門課程」として教育システムが整備され、学生に親身になって対応するアットホームな校風で行っている点である。体験入学ではその部分を強調する資料や説明を取り入れた。課題は本校の存在を知らないといった、学校の知名度の低さである。

(4) 学生支援

結果の数値として目標の達成とはならなかったが、前年度に退学の多かったファッションスタイリング科1年生では施策を講じた成果として退学が抑えられた。

一方のアパレルプロフェSSIONAL科1年の退学が多かったが、精神的疾病や経済的問題といった教員では手に負えないケースが多くなっている。学生間の交友を広げる施策と予防策は引き続き必要である。

(5) 就職支援

一部の学生に見られる就職活動の遅れや就職を希望しない学生との個別相談を定期的に実施し進路を決定して卒業させることに努めた。

職員室全体で進路状況を把握し問題学生への指導内容を複数の教員で検討することで組織的な問題解決に取り組んでいった。課題は問題のある学生が出た場合の対応であるが、個別指導で丁寧に対応していくしか手はないと考える。

(6) 教職員組織

校長を含め現行の9名の体制で運営しているが、授業の他にガイダンスへの教員派遣、見学会の対応など学生募集に関する業務も多く、決して余裕のある体制ではない。また、職業実践専門課程維持のために各委員会の開催や企業との連携授業の交渉・運営といった新たな業務も発生しており、教員一人ひとりが業務の生産性向上に努める必要がある。

(7) 施設・設備

経費節約を優先し、平成30年度に購入した高額なものは特にない。

(8) 武蔵野ネットワーク

卒業生による職業紹介の講演や作品評価を実施している。

保護者に対しては学習成果発表への参観を案内しており今後も継続していく。

(9) 地域貢献・社会貢献

地域貢献として豊島区や公益財団法人としま未来文化財団からの協力依頼に対し、学校の特性を生かした協力を行っている。

* 数値は小数第2位以下を切り捨てて表記

(1) 学校目標に基づく優先課題

①平成 30 年度学校目標

『成長を実感できる仕組み作り』

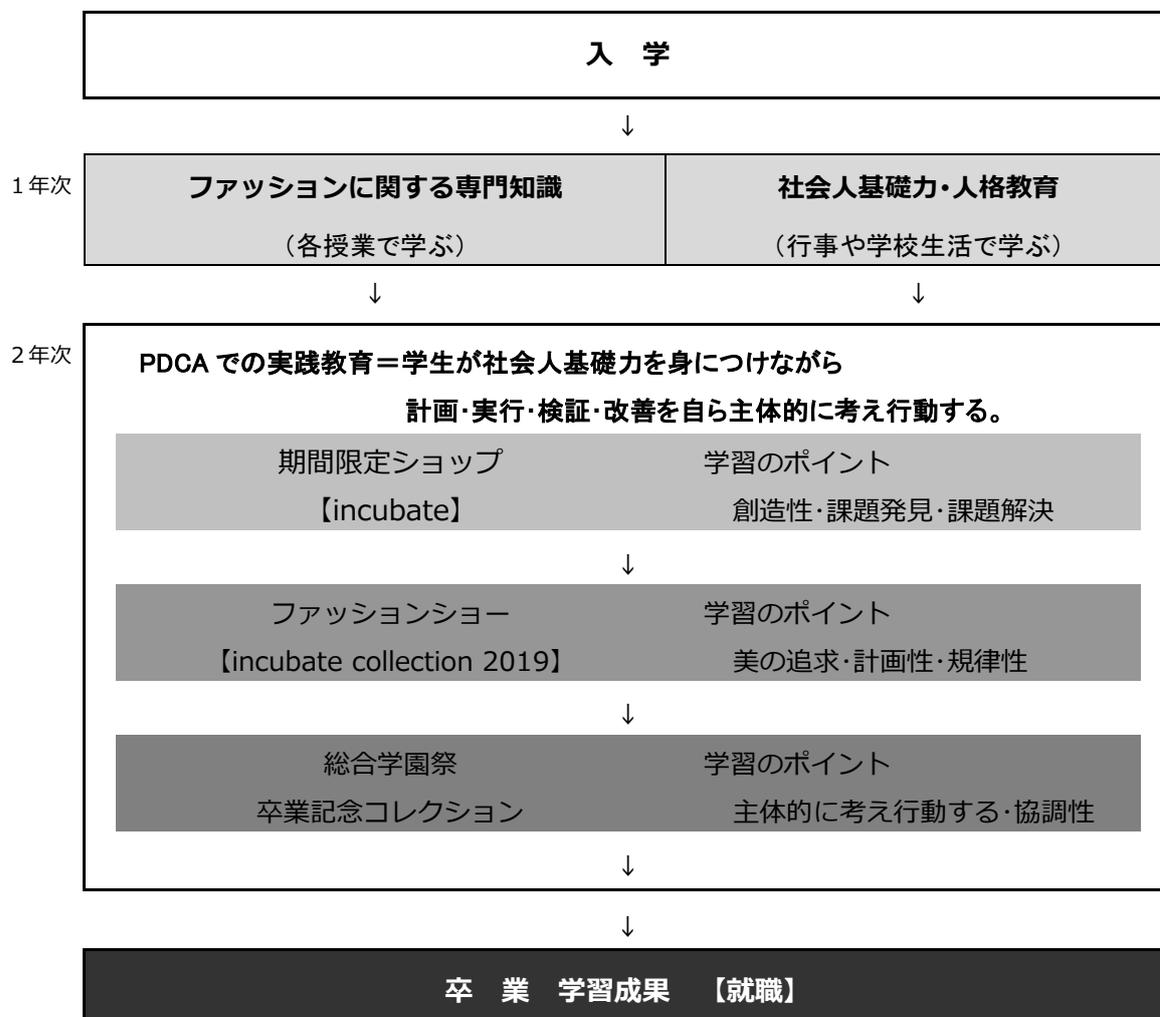
②同目標達成のための優先課題への取り組み

学生自身が身につけるべき能力と卒業次の到達目標を理解して日々学んでいくことをめざし、本校では平成 28 年度から学習到達度を示し評価基準化していくルーブリックの導入に、着手している。導入初年度は常勤教員の授業から始まった取り組みだが、2 年目の平成 29 年度では一部の非常勤講師の授業に取り組みを広げている。短期間で完遂できる事業ではなく平成 30 年度も引き続き『成長を実感できる仕組み作り』として『ルーブリックによる学習到達度の可視化』に取り組んだ。

成果としては、学生から「自分の身についた部分が具体的にわかった」「丁寧な評価によってやる気が湧いてくる」など目標に近づいたことを実感できる感想が面談で得られた。課題としてはカリキュラム全体からするとまだまだ部分的な取り組みとなっている点である。カリキュラム全体での取り組みとすべきであり、そのためには授業担当者のルーブリックの理解向上が必要である。

(2) 教育の充実

【 専門教育と社会人基礎力を融合した教育プロセス 】



①育成する人材像

優れた人格と実践力をもった人材

実践力とは：本学ではファッションの専門性と社会人基礎力の融合した力と定義

ファッションの専門性 … 美意識・知識・技術・コミュニケーション

社会人基礎力 … 考え抜く力・チームで働く力・前に踏み出す力

②教育のプロセス

＜教育手法＞ 実践教育 ～ P D C Aサイクル (plan-do-check-act) の実践

15年前より実践教育を掲げ『期間限定ショップ【incubate】』『incubate collection ファッションショー』『卒業記念コレクション』を複合的カリキュラムの成果発表としてP D C Aサイクルに法って行ってきた。その効果により年々作品のレベルは向上し、カジュアルファッションやリアルクローズの表現では一定の成果を上げるものとなっている。また、成果発表自体の運営を学生が主となり運営することで「社会人基礎力」向上の機会としても活かしている。

③特色ある教育活動

1) 期間限定ショップ【incubate】

実用性を持ったファッション商品を生み出す企画力と、デザインを具現化する製作力を身につける。店舗運営では運営上の課題発見から解決を導き出す思考力と行動力を身につける。

2) incubate collection ファッションショー

作品製作では実用性を持ちながら、美を追求したファッション表現力と具現化する製作力を身につける。ファッションショーの運営では時間内で仕上げる計画性と実行力、組織として動く規律性を身につける。

3) 卒業記念コレクション

作品は学科の特性を活かした各自のテーマで表現し、コレクションの運営ではこれまでの経験したことを踏まえた2年間の集大成として、学生一人ひとりが主体的に考え行動することを身につけ、仲間と一緒に成し遂げる喜びを得る。

〈課題〉

社会が変わり生活様式が変化してきている。そのような社会の中で育ってきた学生達は以前の学生と比べ価値観が変わってきている。今までどおりの実践教育の考え方や手法では通用しなくなっている面がある。社会状況に合った人材育成となるよう、本学の特徴・強みを活かした教育手法の進化が必要である。

④外部との連携

職業実践専門課程の認定要件でもある企業との連携授業を現職の業界人を講師として起用し、企業の業務手法を在学中に身につけ、かつ、人格的にも社会で通用するレベルになるよう、礼節も身につけることを目的として実施した。

<アパレルプロフェッショナル科での取り組み>

- 1) 授業科目『クリエイションワーク1』 連携企業『株式会社B』
アパレル製品の商品企画からデザインまでの企業手法を習得する。
- 2) 授業科目『アパレル技術5』 連携企業『室谷企画』
テーラードジャケットのパターン製作と縫製技術の工業的手法を習得する。

<ファッションスタイリング科での取り組み>

- 1) 授業科目『スタイリストレーニング1』 連携企業『株式会社エーツー』
スタイリストに必要な知識や技術のほか、現場に必要な礼節やプロとして仕事を
するモチベーションを身につける。
- 2) 授業科目『ファッションリテール』 連携企業『株式会社レイ・カズン』
店頭販売に必要な知識や技術のほか、礼節やプロとして仕事をするモチベーション
を身につける。

<課題>

連携する企業側とのスケジュール調整が課題となっている。企業側の本務優先を考慮していかないと実施が難しくなってしまう。また、今後のより良い連携を考えると、企業側に連携するメリットを作っていかなければならない。現状では職業教育への協力という主旨であるが、営利を優先させなくてはいけない企業にとって、社会貢献だけでは継続は難しくなる。企業と学校、双方のメリットを企業側との協議を重ね構築していくことが必要になってくる。

(3) 学生募集

①入学定員及び学生数

学科	修業 年限	入学 定員	入学 者数	収容 定員	在籍者数		
					計	男	女
アパレルプロフェッショナル科	2年	30	27	60	37	4	33
ファッションスタイリング科	2年	60	36	120	60	12	48
ファッションマスター科	1年	10	3	10	3	0	3
専門学校武蔵野ファッションカレッジ		100	66	190	100	16	84

* 平成30年5月1日現在の数値であり、学校基本調査（文部科学省）の数値と一致する。

②オープンキャンパス歩留率等

(a) 具体的な取り組み

競合校の情報収集・分析

競合校の情報を収集・分析をするワーキンググループを教務部内に立ち上げた。分析結果を基に学校紹介で強調する部分や提示すべき資料の見直しを行い、出願対象者から選ばれる伝え方となるよう、工夫していく取り組みを行った。

(b) 目標達成状況

本校の強みは、競合校と比べ教育システムが整備されている点である。また、対象となるすべての学科が「職業実践専門課程」であり、「シラバスの導入」、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシーの「3つのポリシー」が整備され、それに基づいた教育活動を学生に親身になって対応するアットホームな校風で行っている点である。

体験入学での学校説明の中では「職業実践専門課程」について紹介し、認定要件である企業との連携授業、シラバスについて説明を追加した。それによって参加者との面談では、教育の仕組みが整っている学校であると感想も出てきており、強みの認知が広がりつつあるといった感触をつかんでいる。

(c) 課題

微増となった出願の要因とは言い難いが、教育システムが整備されている学校として同規模の競合校と明確な差別化が図れ、教育機関としては強みであると考え。しかし、選ぶ側の出願対象者から見て、本校の強みが選ぶ魅力となっているかは難しい面がある。

本校の存在を知らないといった学校の知名度の低さは大きな課題である。

③ガイダンス・授業依頼対応・見学者対応

模擬授業・見学会 実習メニューを増やす

ガイダンス、見学会をきっかけに本校を知り体験入学に参加するケースは多く、例年通り、教員の対応には力を入れていった。近年、模擬授業や見学会の依頼が多くなっており、効果を上げるためにも短時間で実施可能な実習メニューを増やすことに取り組み、実際の服を着て行う「コーディネート実習」を新規メニューとして導入した。

④広報部との連携

教務部内に立ち上げた情報分析ワーキンググループには、校長付きの立場である広報部員をメンバーに加え運営を行った。情報分析の他、学生の就職内定状況や学校での様子など、広報活動に必要な情報共有を随時行うことで広報部との連携を強化していった。

(4) 学生支援

①退学率

(a) 具体的な取り組み

交友を広げるレクリエーションの実施

友人が少なくなってしまうデメリットに対して、クラス内と学年で行うレクリエーションを4月オリエンテーション期間に実施し、友人を作るきっかけ作りと交友の枠組みを広くしていく施策を行った。

予防策の継続

学生の異変をいち早く察知し問題を大きくしない予防策を基本として行った。クラスへの満足度を測るメンタルヘルスチェック「ハイパーQ U」を導入したことで、学生の問題を早期に発見し面談が実施できたことは効果的であった。

(b) 目標達成状況

結果の数値として目標の達成とはならなかったが、平成29年度に退学の多かったファッションスタイリング科1年生では施策を講じた成果として退学が抑えられた。

一方で、アパレルプロフェッショナル科1年の退学が多かったが、精神的疾病を理由にしたものが5名、経済的問題の学生も3名となっており、教員では手に負えないケースが多くなっている。

(c) 課題

学生間の交友を広げる施策と予防策は引き続き必要である。人間関係のトラブルによる退学は学校側の施策によってある程度は抑えることができると考える。平成30年度に導入した「ハイパーQ U」はクラスの状態を知る資料となるものであり、継続して利用をしていきたい。精神的疾病や経済的な問題は教員の対応範疇を超えるものであり、対応に苦慮する。精神的疾病も含め学生の抱える問題についてはスクールカウンセラーの協力を積極的に仰いでいきたい。教育相談のミーティングを月1回のペースで実施していく。

②生活指導

挨拶や礼儀の指導は日々行っている。人格教育については4月のオリエンテーションで学生に説明をしており、その他行事の度に触れている。より浸透させていくには定期的な取り組みが必要であり、年間の取り組みを企画していく必要がある。

③資格取得

ファッション業界での就職を考えると資格が直接的に内定獲得に有利となることはないが、企業によっては努力の実績として資格取得を評価することもあり本学では取得を推奨していく。

スタイリングマップ検定 ジュニア	【両学科1年次受験	合格率	89.5%】
スタイリングマップ検定 プレイヤー	【F S科2年次受験	合格率	60.0%】
ファッションビジネス能力検定 3級	【両学科1年次受験	合格率	90.3%】
ファッションビジネス能力検定 2級	【F S科2年次受験	合格率	35.0%】
リテールマーケティング(販売士)検定 2級	【F S科2年次受験	合格率	63.2%】
パターンメイキング技術検定 3級	【A P科2年次受験	合格率	100.0%】
フォーマルスペシャリスト検定 ブロンズ	【F S科2年次受験	合格率	100.0%】

④外部コンクール等

平成30年度の社会的評価として、アパレルメーカー「株式会社パル」が立ち上げた「公益財団法人パル井上財団」主催の接客のロールプレイング大会が行われた。ファッション系専門学校各校から代表1名を出し競う大会となり、本校学生が3位入賞『シルバー賞』を獲得する成果をあげている。

⑤学生満足度

「学生と教員の距離が近く、面倒見が良い」ことを評価している入学者が多い。その期待を裏切らない運営を行うために面談とアンケートを併用した検証を行っている。問題点が発覚した際はクイックな改善行動に努めている。

⑥課外活動

クラス内や学校全体で親睦を深めるレクリエーションを実施する。

- 4月 クラス親睦会（オリエンテーション期間中に実施）
- 4月 新入生歓迎会（2年生主催）
- 10月 ハロウィンパーティー（コーディネートコンテスト）

(5) 就職支援

①就職率

学科	修業年限	平成 29 年度					平成 30 年度				
		卒業者	就職希望者		進学・その他	就職率 (就職希望者に対して)	卒業者	就職希望者		進学・その他	就職率 (就職希望者に対して)
			就職者	未決定				就職者	未決定		
アパレル プロフェッショナル科	2年	10	7	0	3	100.0%	9	6	0	3	100.0%
ファッション スタイリング科	2年	40	35	1	4	97.2%	24	22	1	1	95.6%
ファッション マスター科	1年	3	3	0	0	100.0%	3	3	0	0	100.0%
計		53	45	1	7	97.8%	36	31	1	4	96.8%

* 就職希望者=就職者+未決定

* 就職率(%)=就職者÷就職希望者

(a) 具体的な取り組み

例年一部の学生に見られる就職活動の遅れや就職を希望しない学生との個別相談を定期的実施し進路を決定して卒業させることに努めた。

就職指導担当教員には進路決定状況の定期的な報告を行わせ、職員室全体で進路状況を把握し問題学生への指導内容を複数の教員で検討することで組織的な問題解決に取り組んでいった。

(b) 目標達成状況

数値として未達成ではあるが、実質は目標達成に近いと考えている。未決定者の状況として、就職希望という言葉は出てきていても教員の指導は全く受け入れず、就職活動を避け続けるタイプの学生であった。

就職を希望しない学生は経済的に裕福な家庭の為か保護者からは卒業後にゆっくり仕事を選べと言われていたケースであった。

(c) 課題

その学年によって傾向は異なるが、一部の学生に就職活動の遅れが出てしまう。その理由は学生によって様々であるため、明確な改善策がなく対応に苦慮するが、少人数制の強みを活かした個別指導で丁寧に対応していくしか手はないと考える。

②就職先

<販売職について>

販売職に関しては、業界全体で採用に大変積極的である。前年度よりも早いスケジュールで内定を出し、各社ともに人材確保に必死な状況である。しかし、採用基準を落とすまで採用をする企業はまったくない。有益な人材であるかの判断材料として、「社会人基礎力」と「仕事への意欲」を測る採用試験となっている。売り手市場になったとはいえ十分な採用試験対策をして臨まないと内定獲得は難しい状況である。

<企画・生産系企業について>

企画・生産系の求人は低調ではあるが、服の「お直し」や「制服」といった何らかの商品に特化した業務を行っている企業からの求人は増えてきている。労働力を外国人に頼っていた日本の縫製工場においては「日本人の技術者を育てたい」という意気込みを持つ企業が現れ始め、学生に意欲があれば無理をしてでも受け入れたいとする企業も出てきている。

<スタイリストについて>

近年の傾向としてスタイリストアシスタントの採用は積極的であり、意欲があれば勤め始めることは十分可能である。しかし、2～3年は金銭面で苦勞することとなり、その間は経済的支援が得られる学生でないと続けていけない難しい状況である。

③説明会・セミナー・面接指導等

<平成30年度卒業生に向けた2年間の就職支援>

平成29年4月	新入生研修（自ら挨拶できる動機付け）
平成29年5月～9月	卒業生を招いての職業説明（職業理解）
平成29年10月	就職支援講座 リクルートガイダンス開講
平成30年2月	学内企業説明会（企業研究）
平成30年2月	内定者報告会（就職活動の経験談を聞く）
平成30年4月～7月	最終面接対策の個別指導
平成30年6月～平成31年3月	未決定者との個別相談

(6) 教職員組織

①教員数

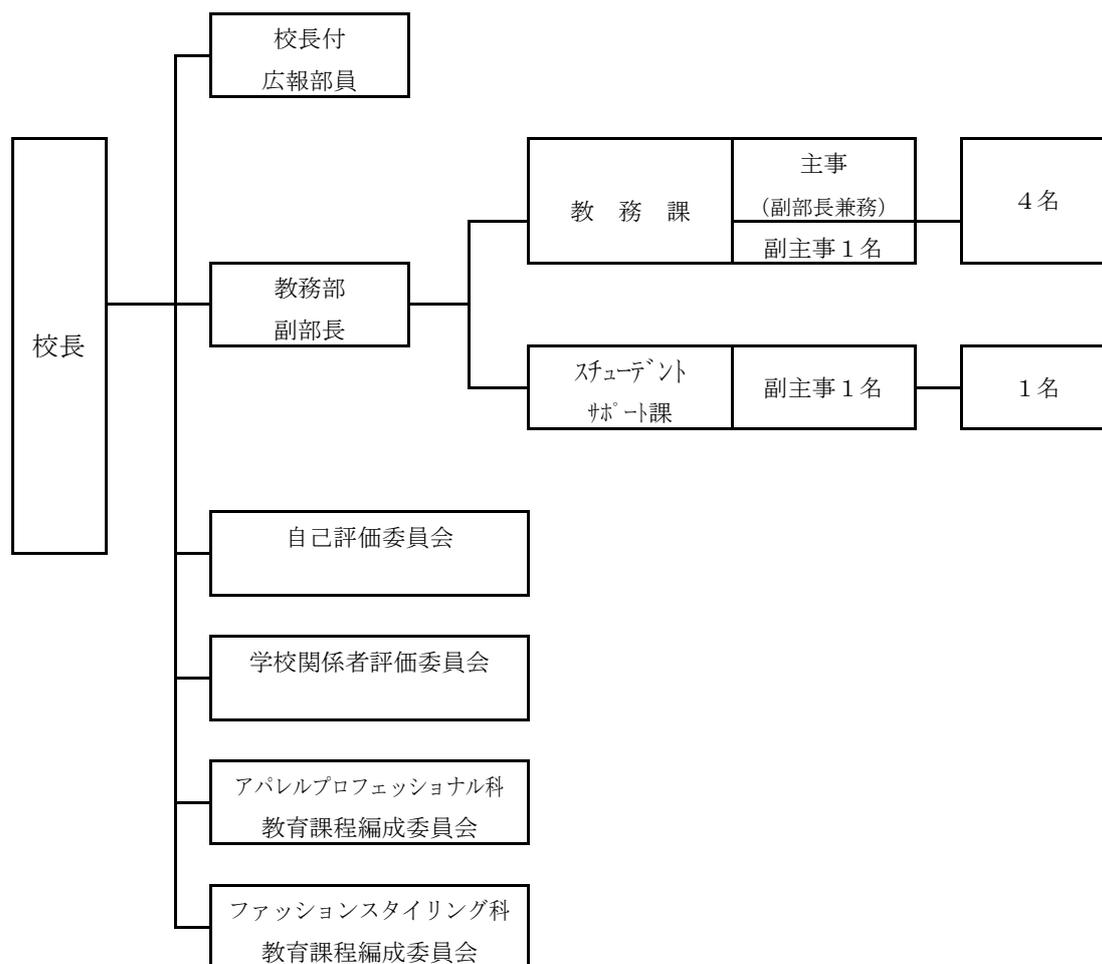
	常勤教員等				非常勤 教員
	校長	教員	教務 職員	計	
男性		3	0	3	9
女性	1	5	0	6	11
合計	1	8	0	9	20

* 2018年5月1日現在の教員数を記載している。

* 教員の人数は、専修学校設置基準が定める要件を満たす者を算定している。

②組織編成および要員

(a) 組織編成



- 【教務課】学習に関する企画・運営・管理。授業評価アンケートの実施。
- 【チューデントサポート課】学生の生活面を中心にした問題について対応。
- 【教育課程編成委員会】外部委員と教員で構成し各学科の教育内容について検討。
- 【学校関係者評価委員会】外部委員と教員で構成し学校運営について評価。
- 【自己評価委員会】学内教員で構成し自己点検・自己評価報告書をまとめる。

<その他の部会等>

- 【就職指導】両学科2年担任と教務部副部長が担当。
- 【学生満足度調査】両学科の各学年担任より2名選任。
- 【各行事】教員が2～3名程度のユニットを組み運営。
- 【クラス編成：担任体制】

- アパレルプロフェッショナル科1年1クラス：担任1名
- アパレルプロフェッショナル科2年1クラス：担任1名
- ファッションスタイリング科 1年2クラス：担任2名
- ファッションスタイリング科 2年1クラス：担任1名
- ファッションマスター科 1クラス：担任1名

(b) 要員

校長を含め現行の9名の体制で運営しているが、授業の他にガイダンスへの教員派遣、見学会の対応など学生募集に関する業務も多く、決して余裕のある体制ではない。また、職業実践専門課程維持のために各委員会の開催や企業との連携授業の交渉・運営といった新たな業務も発生しており、教員一人ひとりが業務の生産性向上に努めることが必要である。

平成30年度は育児休暇取得者が1名、年度途中で退職者が1名出ることとなり、人員が少ない状況で業務に臨むこととなったが、教員間の協力体制を強化することで運営に支障出ることなく業務を収めることができた。

③能力開発

『ファッション業界の実務研修』

- 平成29年6月 「素材セミナー 播州大学」セミナー参加
- 平成30年10月 「パリ・ミラノ2018 S Sコレクション」セミナー参加
- 平成30年11月 「売れる、買われる仕組みの作り方」セミナー参加
- 平成30年12月 「売れる、買われる仕組みの作り方」セミナー参加
- 平成31年3月 「パリ・ミラノ2018 AWコレクション」セミナー参加

『指導方法向上の研修』

平成 30 年 6 月 「ハイパー Q U を利用した学生対応」 勉強会開催

『就職指導向上の研修』

平成 31 年 2 月 「織研新聞社主催 業界研究セミナー センケン job2020」参加

(7) 施設・設備

① 営造・修繕・購入等を行った施設・設備

経費節約を優先し、平成 30 年度に購入した高額なものは特にはない。

(8) 武蔵野ネットワーク

①卒業生との連携

(a) 卒業生の社会的評価

本校は平成17年より校名及び設置学科とカリキュラム変更し、そこからの卒業生数は平成30年度までに655名である。卒業生の社会的評価は一部の就職先企業人事担当者からの評価を聞く程度に止まり、把握が難しい部分である。

(b) 卒後支援

卒業後、学校に就労相談に来るケースは多少あるが、卒後支援の具体的な行動はできていない。卒後支援として何ができるのか検討課題である。

(c) 連携内容

現場で活躍中の卒業生を学内に招き講演や作品評価を実施した。

【就職支援特別講義】卒業生による業務内容や業界の紹介

目的：職業や業界の理解を深め進路選択に生かす。

- デザイナー 濱田 静 4月10日実施
- スタイリスト 千葉友香子 5月22日実施
- スタイリスト 平野 桃 7月17日実施
- 独立・起業 古本 舞 3月6日実施

【学生作品への評価】期間限定ショップ・ファッションショーでの作品や運営の評価

目的：企業視点とクリエイター視点での評価の違いを知る。

- 株式会社ベイクルーズ デザイナー 濱田 静 11月24日実施
- 萬リンク株式会社 代表 古本 舞 11月24日実施

②父母との連携

(a) 保護者の傾向と対応

学校での生活から就職まで関心のある保護者から、入学後は学生自身で管理することを方針としている放任の保護者等、保護者の学校や教育への関心度にはばらつきがある。

(b) 連携内容

学習成果発表の場へ参観案内

学校として保護者へ教育成果を伝えることは必要である。学生にとっても、自身の

成長を保護者に見せることは喜びでもあり学習意欲向上にも繋がると捉えている。平成30年度も作品発表の参観を促し特にファッションショー incubate collection では多くの保護者の来場があった。

(9) 地域貢献・社会貢献

地域貢献として豊島区や公益財団法人としま未来文化財団からの協力依頼に対し、学校の特性を活かした協力を継続して行っている。

豊島区への協力実績

平成15年～平成30年	よさこい祭り 審査協力
平成23年	豊島区文化祭でのファッションショー出演協力
平成23年	オーケストラの衣装デザイン・製作協力
平成26年～	ソメイヨシノ桜の観光大使選出のコンテスト審査協力
平成28年～	豊島区国際アート・カルチャー特命大使に片桐芳子校長が就任
平成29年	としまビジネスサポートセンター 縫製業務の下請け業者紹介